

豚の脚で求婚への返事 リبونはOKキュウリはNO

フランス北東部を占めるアルザスとロレーヌの両地方は、ドイツ語が通じる世界である。というのも古来、フランスとドイツの間で領有をめぐる係争地であったからである。最終的にフランス領と確定したのが三百五十年前。

しかし、その後二度にわたってドイツ領となる時代も経験した。それは普仏戦争後の一八七一年〜一九一九年、ナチス占領下の一九四〇年〜一九四四年のことである。

その当時はそれぞれエルザス、ロートリンデンという、ドイツ風の地名で呼ばれていた。フランスのなかでドイツ文化の影響を色濃く受けた地域で、ビールの消費量も最も多い。

当然、料理にもドイツの影響が大きく、豚肉やガチョウを使った料理が多いこと、小麦粉、卵を使った団子・ヌードルがアルザス地方の料理を特徴づけている。

一方、ロレーヌの人々はとくに豚肉を好み、ベーコン、ソーセージ、ブーダン（腸詰の一種）などの豚肉加工品はこの地方の特産物となっている。

このように、昔から豚に親しんだ生活を送ってきたロレーヌ地方には、次のような面白い風習があったと伝えられている。

年ごろの若者が心憎からず思っている娘に結婚を申し込むと、その返事がなんと豚で決

まったというのだ。

相手の家で、その若者を気に入って嫁にやってもよいと考えたら、豚の脚にリボンと月桂樹を添えて渡し、不承諾の場合は、小さいキュウリと豚のシッポを添えてその意を示した。

愛の象徴としてリボンを贈る習慣は中世からあったというが、それがどこで豚の脚と結びついたかわからない。

しかし、娘が結婚を申し込まれるたびに、大事な豚を処分しなければならぬとしたら、早く嫁に行ってくれないかと親は思ったに違いない。

昔々の、のどかな時代の物語ではある。

